

# 三貨制度の本格的変容過程 その1

The real changed contents in the Sanka System. Part1

三 上 隆 三  
Mikami, Ryuzou

## ABSTRACT

When shogunate XI and XII inherited the office of Yedo-Shôgun, the redink public finances increased sharply and rapidly. And that produced Simonsen and Gomomnegin to be given purchase-power to the public finances in the first stage. Then same nature coins was produced in a series. Tempo-ichibugin is prentative money. Especialy Meiwananryo-nishuban produced in Meiwa 9th=1772 as one of them is the subsidiary coin of Koban in reality. So Japan established the gold standard money system. At same time she is runner-up to England established it in 1717.

## I 十一代目・十二代目

世界的権威のあるノーベル賞の榮譽をうけた天下の秀才と才媛との間に生まれる子供が、必ずしも秀才であるとは限らない。逆にその子がママ平凡以下の知能しか持っていないという事例を吾々は知っている。同様の例が名君の誉もたかい吉宗の子で九代将軍になった家重の場合がこれにあてはまるのである。

家重は父に似ることなく頭が極めて弱かった。その故にとは言えないまでも、無類の女好きだった。<sup>ニロクジ</sup>二六時中=<sup>ココノ</sup>昼の九ツから四ツまでの六と夜の九ツから四ツまでの六とで六が二ツということから二六時=一昼夜=1 日中、女を抱いているのでまさに痴呆状態だった。本誌にふさわしくないことを書くのは気がかりではあるが、史実を述べているので読者の御海容を願う。その上、更に悪いことには小便が近いという不治の病をもっていて寝小便の癖があった。毎月の上野寛

永寺参詣時も、道筋にあたる各町毎には必ず將軍用のトイレ御用の家が指定されていた。江戸城中の長い廊下では常時、「おしめりでございます」と雑巾ソウキンをもつ近習キンジュウが拭いてまわったほどである。

このような彼にも一つの特技があった。有名な山下画伯もまさにその典型的な一例なのだが、家重は天下無類の将棋好きであって、その実力は名人そのもので天才だった。将棋指南役として將軍家おかかえの大橋家名人も、將軍名人には刃がたたず、城中での実力本位のトーナメント方式での優勝は常に女とたわむれながら指す將軍だった。

本人が如何に清廉であってもその番頭役に人をえなければ貨幣支出はルーズにならざるを得ないであろう。しかし幸いにも吉宗の残した雰囲気イヱハルがそれを防いだようである。

母になった女性がよかったのか十代將軍になった子の家治イヱナリはノーマルな人物だったようである。しかし隔世遺伝とでもいうべきか、11代將軍に就いた家斉・12代將軍の家慶イェヨシに家重の好色の血がつたわったのである。具体的にいうと大奥生活はただれにただれていて、家斉の側室は40人、そのうちの22人の腹から55人の子が生まれた。家慶の場合は小規模化して側室8人から25人の子をなした。こちらの方が効率ス?!がよいようである。

よくも図に乗ってと叱られそうだが、同じ例を世界に求めるとドイツは神聖ローマ帝国はザクセン（現ドイツ）のドレスデン生まれの選帝王たるアウグストⅡ Friedrich August II（1670–1733）は強健王のアウグスト August, Der Stärke としての名で知られた人並み外れた怪力・性力の持主だった。嫡子以外に愛妾に生ませた子はなんと354人という。驚きである。肉食人間と草食？＝菜食人間との差なのだろうか。

これに比すればアブノーマルとはいえ、当時の武家の常識であった子孫無し＝家がたえるということとを避けるという行動から二將軍の行動は大幅に出るものとはいいい切れないだろう。

こんな下らぬ話柄を長々としたのも、実は又ぞろ開始される文政元＝1818年――

天保8=1837年の出目追求の debasement こと一大改悪鑄の印象ぶかい、したがって当然だと納得してもらえら<sup>ナットク</sup>る一因となる事例を示したまでのことである。早い話しが、將軍になる子以外のすべての男の子は大名家への養子・寺院の僧にするにも、女の子は嫁に出し尼僧にするためにも多大の金<sup>カネ</sup>がいる。これらの数多い子供の中には目・耳の不自由なものもいたのであるからなおさらのことである。

## II 緊縮財政

貨幣の改悪鑄によっての出目追求は一直線に即座に出現したのでは決してなかった。往々にして世の現状・未来を觀察しての憂国の志をもち行動をおこす人物が登場するものである。前節で貨幣改悪鑄の原因を作ったよからぬ人物として名指しした人物たる11代將軍の家斉も、就任早々は名將軍への意欲もあって、松平定信を大老格の老中首座に任命した。天明7=1787年6月のことである。彼は江戸時代の三大改革の一つである寛政の改革の主導者として有名である。彼の念頭には大成功の享保の改革の実例があり、それと同じ成功は確実との自信があったものと思われる。その根拠となるものの一つは享保の改革を果たしたのは祖父にあたる吉宗であったこと、もう一つの根拠となるものは、吉宗の子等が形成した三卿の筆頭家の田安家出身でもあり、逆に言って孫たる自分<sup>ヤ</sup>も痩せたりとはいえ白河藩主だったからである。

こんなエピソードがある。定信は江戸城中の廊下を連絡をとるために右往左往する・手に廊下の床板にとどかんばかりの2尋<sup>ヒロ</sup>（尋とは大人の両手をひろげた長さで1.5-1.8メートル）の長さの紐をつけた文箱を持っている御殿女中に気づいた。彼は早速<sup>カネ</sup>に金食い虫の大奥の象徴として「その紐は長すぎるので短くするようにせよ」と命じた。それに対し無名にも等しい彼女は堂々と返答したのだった、「これは御寿命紐<sup>ガイシュウイッショク</sup>といって將軍様の長命を祈るものです。なのにお殿様は將軍様の早世を願うのですか」と。これはまさに鎧袖一触である。享保改革を成功させたのは陣頭に立つ人物のもつ將軍自身という強力な創造的破壊

力あってこそその結果なのである。吉宗の孫で田安家出身の白河藩主の実力では、数段下の力不足の創造的破壊力より発揮できなかったのも無理はない。とはいえともかくも寛政改革にて大分銅金 5・大分銅銀 1 を寛政 5＝1793 年に御金蔵ゴキンゾウにいれることができたのである。

三大改革のもう一つの天保改革を断行した憂国の人物・水野忠邦にも以下のエピソードがある。財政悪化を生む癌とにらんだ大奥にメスを入れるべく御殿女中頭の姉小路伊豫子イヨを呼び出して華美にならぬよう万事質素シツソにせよと命じた。これに対し「万事シカとうけたまわりました。ところでお殿様（水野のこと）には御側室はおられますか」と逆に質問を発した。彼は武家社会の常識にしたがって家が断絶しないための対策として当然に「もっている」と答えた。そこで姉小路がいった、「大奥にいる女は若くして健康体なのです。しかし大奥は將軍以外には男はおりません。彼女達は当然の男以上とさえとも思われる性欲をみたすことを断念しているのです。その見返りこそが衣裳なのです。その華美といっても大したものではありません」と。

將軍家との血のつながりのない単なる幕臣の一藩主にすぎない人物の財政再建への創造的破壊力は松平定信よりも更に力の弱いものたらざるをえなかった。それでもなお天保 13＝1842 年に大分銅金 3・大分銅銀 23 個を鑄造して御金蔵に納入している。

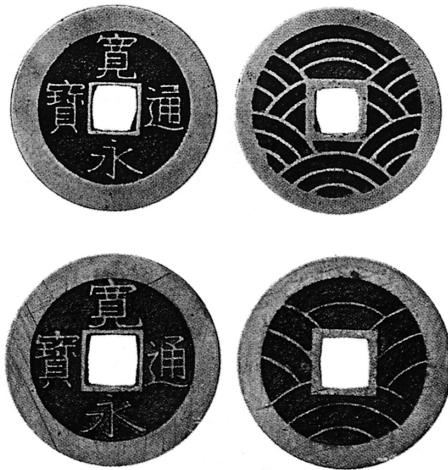
とまれ財政面からみれば悪名たかき 11 代將軍家斉には松平定信が・12 代の家慶には水野忠邦がついてそれぞれ財政支出の引しめを断行した。それでも打ちよせる波に吠える犬の行動にも似て全体の幕府財政の悪化という大勢を改革することは出来なかった。これが文政・天保の出目追求の大改悪鑄の背景であり、その結果として文化文政・天保の相対的安泰期・文化の花が開くのである。

### Ⅲ 四文錢

先ず当局が財政の一助にもと銅と亜鉛を合金させた真鍮シンチュウの四文錢——同じ銅を使用するなら同一量の銅により大なる購買力をつけようとしたもので、これ

までの一文銭の直径 8 分=2.4cm ・ 量目一匁に対し 9.5 分=2.8cm ・ 量目 1.4 匁と重量化=大型化して区別したのみならず、新製造直後は金色さえしていて美しいものである。因みに銅の使用量は一文銭の 74% に対し四文銭は 70% だった。それだけ銅の有効使用=財政の一助になるというわけである。例の講談「銭形平次」では、作者の野村胡堂<sup>コドウ</sup>によれば犯人に投げつけるのは威力をつけるためにこの四文銭だったということである。四文銭であることを周知させるべく一文銭と区別させるために大型化したことの他に、銭の裏面に波模様——これを<sup>セイガイノ</sup>青海波とよぶ——をつけた。ために<sup>ナミセン</sup>波銭というニック・ネームでよばれた。当初は波の数が大波 7 波の 21 波だったが、鑄造において砂ぬけがわるく、後の明和 6 年から大波 4 波の全 11 波になった。説明無用の図を示すことにした。

寛永通貨（四文銭）（明和江戸十萬坪所鑄銭）



この波数の改良によって人間というものの不可思議な存在であることを物語るかのような一つの迷信が生まれた。<sup>ハ</sup>波=歯から前の青海波 7 波・21 波の四文銭は<sup>リヤク</sup>歯痛防止にご利益があるが後の改良四文銭にはその力なしというのである。この四文銭の流通普及によってソバの価格が<sup>ニハチ</sup>二八ソバで 16 文。結髪料が 32 文、

アンマ  
按摩 16 文というように価格・代金を 4 の倍数にした。そのために本来四<sup>シ</sup>＝死と  
して四<sup>シ</sup>の数を忌む日本人なのに串団子<sup>クシダンゴ</sup>を五個 5 文で販売していたのが、この 4  
の倍数化によって団子の数を四個にして価格も 4 文にしたという商品もあった。

八文は 泳ぎ十二文は 飛びにけり

という放生の光景をつたえる川柳がある。これによって放生の亀は 8 文で泳い  
だということであり鳩は 12 文で飛んでいったということである。上記のように  
串団子も本来の 5 個から 4 個になったが、平成 10・11＝1998・1999 年ころに  
NHK（テレビ）の子供歌謡で「ダンゴ三兄弟」の流行で一本 3 個の普及をみた  
ことがある。歌は世につれ世は歌につれということだろうか。その後団子の数  
はどうなったやら？ 気にかかることではある。とまれ幕府財政の一助にという  
ことで將軍家治の明和 5＝1768 年 4 月に銀座にて四文銭は製造発行された。こ  
れは以後につづく出目追求の改悪鑄 debasement の真のというか単独でも誰の目  
にも明白な——というのは明和 2＝1765 年の五匁銀の事実的先駆けがあるから  
なのだが、後述の如く実質的にはそうでないものが存在しているためである——  
本格的開始を物語るものだったのである。

#### IV 古典落語・刻そば

経済学の理論・歴史・政策の研究成果を発表する神聖な場である本誌にこ  
ともあろうに落語を登場させることなど前代未聞の……とのお叱りの言葉が聞こ  
えてきそうではあるが、しばしこの結論によって納得・承認を得たいのである。

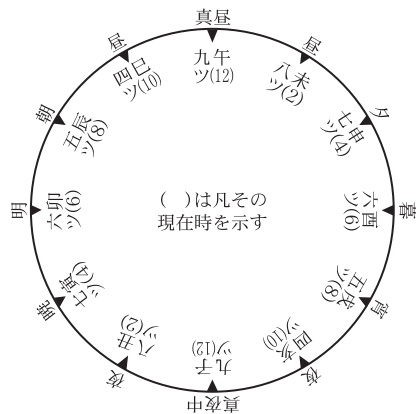
トキ  
落語とは具体的には「刻そば」と題する江戸古典落語であって、記憶はうす  
れているが、戦中か敗戦直後に名人の春風亭柳橋によって口演されたのを感銘  
して聞き入ったのを昨日今日のように思っている。

ハナシ  
この咄は、現代人に予備知識を前もって承知してもらう必要があるのだが、名  
人の柳橋師がそれを如何にうまくこなしたかを残念にも忘れてしまったので、  
これから先ずギコチないが予備知識として、江戸時代の時刻の解説から始めた  
い。現代の時刻は今更説明無用ながら、太陽の南中を正午とし 24 等分にしたも

のであって、要するに真夜中でも早朝でもどの一時間をとっても同じ時間の長さである。この時刻の表現法を<sup>ヘイブンジ</sup>平分時法とも定時法ともいう。これに対して江戸時代のそれは夜の<sup>トキ</sup>一刻と昼の一刻とでは時間の長さが違うのである。このことからこれを一般に不定時法という。どうしてそんなことになったのか。理由は以下の通りである。

不定時法時間の基準は<sup>ヒノデ</sup>日出と日没時点の決定にある。この事実は一年を通じて不変である。現行時間でいえば夏のそれと冬のそれとでは二・三時間の差があるのだが、不定時法では基準の設定時を不変——したがって本体の時刻の長さは時期によって必然的に違ってくるわけで、不定時法の名称の<sup>ユエン</sup>所以なのである。更に日本より緯度の高い夏のロンドンでは、夜は十時になってもまだ明るい。日本の祖父母に送ってもらった花火を楽しむまで、ねむくて起きていられない子供に同情したことだった。とともに祖母の愛情も花火になって花と開かなかったのである。

不定時法時刻表



聞くところでは不定時法における日出時点はその直前の暁の明星が二三チラリと見える刻。日没時点は日没直後に宵の明星がマタタクの見える時点とか。これを前者では<sup>アカツキ</sup>明六・後者を<sup>クレ</sup>暮六ツとよぶ。これを基準にしてまず一日の長さを二等分し、そのそれぞれを更に六等分する。その結果、現代時間の午後 12 時＝午前 0 時を真夜中の<sup>ココノ</sup>九ツ＝子の刻、ついで現在時間で凡そ 2 時間後を夜の<sup>ユル</sup>八＝<sup>ヤツツ</sup>丑の刻である。ご承知の牛の刻まわりはこのころに決行されるわけである。つぎは暁の<sup>アカツキ</sup>七ツ＝寅の刻・<sup>ナナ</sup>明六ツ＝卯の刻・<sup>トラ</sup>朝五ツ＝辰の刻・<sup>アケム</sup>昼四ツ＝巳ミの刻とつづく。ついで一転して再び真昼の<sup>ウ</sup>九ツ＝午の刻・<sup>アサ</sup>昼の<sup>タツ</sup>八ツ＝<sup>ヒル</sup>未の刻・<sup>マヒル</sup>夕の<sup>ユウ</sup>七ツ＝<sup>ヒツジ</sup>申の刻・<sup>ウマ</sup>夜の<sup>ユウ</sup>六ツ＝<sup>マヒル</sup>酉の刻・<sup>ユウ</sup>夜の<sup>ユウ</sup>五ツ＝<sup>ユウ</sup>戌の刻・<sup>ユウ</sup>夜の<sup>ユウ</sup>四ツ＝<sup>ユウ</sup>亥の刻・<sup>ユウ</sup>夜の<sup>ユウ</sup>三ツ＝<sup>ユウ</sup>子の刻・<sup>ユウ</sup>夜の<sup>ユウ</sup>二ツ＝<sup>ユウ</sup>丑の刻・<sup>ユウ</sup>夜の<sup>ユウ</sup>一ツ＝<sup>ユウ</sup>寅の刻とつづく。

七ッ＝<sup>サル</sup>申の刻・<sup>クレム</sup>暮六ッ＝<sup>トリ</sup>西の刻・<sup>ヨイ</sup>宵五ッ＝<sup>イヌ</sup>戌の刻・<sup>ヨル</sup>夜四ッ＝<sup>イ</sup>亥の刻とくり返される。なぜ十から始めずに九ッから逆行して四ッで終るのかについては恥ずかしながら不勉強で知らない。乞教示。とまれ不定時法の時代は一日が六等分の二回であることから一昼夜のことを二六時中と称したのである。これをもとに六を残して現在の一日を四六時中というわけである。以上のことから不定時法時刻では夏と違って秋になると夜の時間は長くなるので秋の<sup>ヨナガ</sup>夜長という実感をこめた言葉が生まれるのであって、決して単なる形容ではないことがわかる。因みに 子供に午後に与えるオヤツはこの未刻の昼八ッに由来する言葉である。

凡そ現在時間でいえば大体午前 11 時から午後 1 時の 2 時間が午の刻である。一般にはこれを三等分して上刻・中刻・下刻とよんだ。一方では二等分して前半を初刻・後半を<sup>シヨウ</sup>正刻とよんだ。これが一体化され太陽が南中の位置にある時点を午の刻にあっても特にこれを<sup>シヨウゴ</sup>正午（＝午前 12・午後 0 時）とよぶ。厳密に<sup>シヨウシ</sup>いえば<sup>シヨウチュウ</sup>正子・<sup>シヨウイン</sup>正丑・正寅…があってもよいはずだが、実際には正午以外は存在しないようである。これで予備知識としての準備も完了したので、いよいよ本丸に突入することとする。古典落語の題は「刻そば」である 暮六ッを告げる寺院の鐘がひびいていた。ソバ屋に首を突っ込んだ客人がソバを「このソバは腰があり汁も極上だ」などとオダテながらやがて食べ終った。㊦＝㊤「ソバ代を支払うよ。暗くてイケネーヤ。数えて渡すからシッカリ受け取ってクンナー。いいかい。それ一ッ・二ッ・三ッ・四ッ・五ッ。今何刻だい」㊧「へー、六ッでございます」㊥「それ、七ッ・八ッ……」と要するに<sup>アザヤ</sup>ことも鮮かにして自然に<sup>モウ</sup>ソバ代金を 1 文儲けたのである。

この<sup>ヤ</sup>遣り取りの一部始終をみていた与太郎（ヨ）は、あやかって俺も 1 文安くソバを食べようとソバ屋をさがしはじめた。運わるく悪条件も重なって探しあぐねていたがようやくのことに見つけることが出来、早速にソバを注文し、先人の口上まで真似てソバ屋をオダテながら食べ終った。㊦「代金を支払うよ。暗いので数えて渡すから確かめて受けとってクンナー。それ一ッ・二ッ・三ッ・四ッ・五ッ。今何刻だい」㊧「へー、四ッです」。㊥「それ五ッ・六ッ・七ッ……」



…」と五ッを二度払いして逆に1文損をした。

明治時代に上方落語「刻うどん」を翻案して文豪・夏目漱石に稀有の芸術家であると激賞された三代目柳屋小さんによって「刻そば」と題して口演され、現在につづいている。

落語に造詣のふかい友によれば享保のころに甘酒による同趣旨の落語もあったとか。それはともかくとして、銅銭本来の1文銭あってこそ「刻そば＝刻うどん＝刻甘酒」なのである。どんなに遅くてもこの古典落語の原形となるものは悪化幕府財政の一助にと改悪鑄された4文銭が登場する明和5年以前でなくてはならない。4文銭ではそもそもこの咄が成立しないからである。

## V 銭貨銘々伝

話を本来の本道たる貨幣に戻す。さきに本稿で明和5年4月製造の真鍮四文銭を以って出目追求の本格的開始を物語るものと定義づけたのだが、実は真の意味ではそうではなかった。

当時、改悪鑄によって出目を得るにも、そもそも製造すべき貨幣そのものの素材入手に四苦八苦の状態だったのである。金銀はもとよりのこと銅でさえも近似状態だった。輸出銅不足のため来日の清国船数を以前よりも4隻へらし年25隻にした（元文元＝1736年）ほどである。そこで相対的に豊かともいえる鉄が素材として採用され、明和2＝1765年9月に金座に鑄銭定座を兼帯させ本所亀戸で鉄銭の寛永通宝一文銭が製造された。これが真の本格的出目追求の開始を告げるものだったのである。

寛永通宝鉄銭登場の背景について一瞥しておこう。本誌前号において「ユエトユエハオ越多越好」という中国語熟語をヒケラカシ？ながら、大不況になった金量最高の享保金をやめ、長命の安定期をもたらしした金量を削減した元文金の製造発行流通を論じた（P.16）。くり返すことになるが、元文金のことをその文から文字金のニック・ネームでよぶのだが、商人・町人はこれに対応して、その金量の減少分だけ価格＝物価を上昇させ、文金（文字金のこと）高島田という流行語で、

町人庶民は好況＝インフレを招来した貨政を批判したということを述べた。

このような社会状況のもとで惹起された物価上昇は錢貨の増大要求を伴うものであるが、既存量では不足となって金1両＝4000文という公定錢相場を大幅に錢価騰貴となって乖離してしまった。当局はこれを公定相場にもどすべく急拠鉄製の寛永通宝錢の増産にふみ切ったというわけである。

説明無用ではあるが、鉄の寛永通宝は手の汗によってでも簡単に赤錆<sup>アカサビ</sup>が出るために不評そのものだったことは不幸といわなくてはならないのだが、このことのおかげで初期代表格たる出目追求のための真鍮四文錢が好評裡に愛用され普及拡大となるわけである。「禍<sup>ワザワイ</sup>転じて福となる」ということわざがあるが、何が幸をもたらすかわからぬというのが人生というものだろうか。

これからいよいよ文政——天保における大改悪鑄の考察に入りたいのであるが、その前にここで錢貨の話が出たついでに以降における幕末までの主要錢貨を集中的に考察しておく。

①万延元＝1860年に、名こそ精鉄の四文錢が製造された。裏にはルール？にしたがって青海波模様がほどこされている。勿論赤錆で悪評。

②天保六＝1835年に金座で小判形の真鍮錢が製造された。錢貨たることを示すために、その象徴として中央部に方孔をもつ。ただし1枚は当百＝一文錢百枚に当たる＝百文錢として流通させた。通用価値表示錢の第1号であるが後続なし。出目追求の象徴的錢貨である。

③文久3＝1863年に製造の文久永宝四文錢。直径0.87寸＝2.64cm・量目0.9匁＝3.37g。品位・銅83.1/100＝2.8g。波錢こと真鍮四文錢よりも小さく軽い。

天保通宝当百錢の高出目＝収益による大量生産のみならず、これにあやかるべく他藩の大量偽造もあり、且鉄錢の悪評も加わり、これらに<sup>コダ</sup>応えるものとして登場したのが文久永宝なのだが、品質不善にて発行効果はなかった。

## VI 文政——天保の大改悪鑄

いよいよ本格的大変容の開始たる文政元＝1818～天保8＝1837年にかけての

金貨を中心としてそれらの考察を進めたい。

出目益金の必要は当然のことながら幕府の財政支出増による。その一つは経常費は別にして、不意に天災地変が発生し、これに対応するものは幕府当局ということになっていた。もとより封建時代を反映して幕府には全国的課税権がなかった。唯一の例外は富士山の噴火にともなう大量降灰の処理のための課税がある。このような予期しないいろいろの天災による有無いわずぬ財政支出が出目をのぞんだ。それに加わるものは平和裡の貨幣経済の発展→平和ボケのもとでの將軍父子の子供の大量生産？を思い出してほしい。これが又出目の捻出を求めるのである。それだけに文政——天保の大悪鑄によって欲求がみたされたから相対的安定期が出現したのである。いわゆる江戸文化の開花も同然である。

コンコンと湧き出る泉のように人間というものの悪知恵というものも尽きることなく、かくも次から次へと出現するものかと驚くばかりであるが、先ず文政元年に出目を求めてのそれが新工夫として登場した。臨時又は代理とでも形容すべき金貨の発行である。文政元年発行の眞文二分判<sup>シンプン</sup>これである。

当然ながら二分判とは小判＝一兩判の半分の金貨である。金には四進法の兩・分・朱の体系があり小判1枚の純分＝二分判2枚の純分でなくてはならない。ところが眞分二分判は元文金群にない二分判を親切にも？名乗って加えるのだとばかりに「眞文」の名をつけたもののその実体は以下の計算の通り純分で0.33 匁の出目を入手するのである。

元文小判 2.3 匁（純分）＞眞文二分判×2＝1.97 匁（純分） ∴0.33 匁の出目＝改悪鑄益。

この眞分二分判の登場は有名なグレシャムの法則が作動して良貨の元文金が姿を市場から消すことになり眞分二分判の天下となる。

次に登場するものは次期の中心金貨たる小判なのだが具体的には文政小判これである。ところがこの小判は天下をとった眞文二分判に拘束されて、1.97 匁とあるべきところが1.96 匁しかなかった（純分で。以下同じ）。ここにも出目が生じる。文政2年のことである。そして注目すべきことは補助金貨＝二分判

が中心金貨＝小判の金量上限を規制するという点である。

もとよりこの文政小判はこれまでのルールにしたがって純分 1/4 をふくむ一分判とともに発行された。これを前提としての文政元年と同じ手法での出目入手のための行動が文政 11 年にくり返されるのである。

実はそれに先立つ文政 7 年に江戸貨幣史上で最低最悪の金貨＝文政一朱判が発行された。朱という単位を具現する金貨を登場させるという意欲は認めるものの、<sup>マツラ</sup>松浦清が有名な随筆集『<sup>カッシャワ</sup>甲子夜話』の中で、商家に温存されていたこの一朱判が火災をこうむりその後それが銀貨に変じた姿で発見されたという程に純分が貧相な金貨だったのである。それは一朱判 $\times 16$ ＝一両分 0.738 匁で、その時の小判・文政小判の 1.96 匁と比すれば出目追求の猛烈さがわかるというものである。当局もその愚行が身にしみたらしく、このような極端な行動こそしなくなった＝極端でないものはそうでないということである。

ここで上記の文政十一年にもどる。この年に新しい草文二分判が製造された。ここに言う草文とは上記の眞文に対する語であって、コイン銘の文がいわゆる書法の<sup>カイショ</sup>楷書体が眞文とよばれ、それが<sup>ソウショ</sup>草書体のものが草文である。眞文の楷書体をもつ金貨は元文小判・元文一分判であって、このグループにない元文二分判を発行してあげるとのおためごかし＝親切心を売り込んだ人物は必ずや存命ならば吉宗の逆鱗にふれ、厳罰＝獄門・磔？に処せられたことだろう。

草書体の文の銘をもつコインが悪貨の草文二分判であって文政小判・一分判の補助金貨として導入されたが、文政小判の 1.96 匁に対して草文二分判 $\times 2 = 1.71$  匁にすぎず、両者の差の 0.25 匁が出目となるわけである。

ところが、文政金について製造された中心金貨は天保 8 年の天保小判なのだが、その純分の 1.70 匁という数値を前の補助金貨の資格にすぎない眞文二分判が文政金を拘束したのと同様に草文＝二分判が規制したのである。これはまさに貨幣上の下剋上とっていいだろう。

ここで上述の論旨をまとめてみよう。基本金貨＝小判・一分判と品位の低い臨時金貨＝二分判との差が出目を与えはするものの、グレシャム法則の作動に

よって悪貨の天下となって物価が上昇し・折角の出目効果<sup>ソウサイ</sup>が相殺されることになる。ここで又ぞろ更なる出目を求めての貨幣の劣悪化を導くという悪循環におちいつてしまうのである。この悪循環を脱出するものとして＝幕府財政救済のエース・決定打となるものに考えつくという悪知恵者？が登場するのである。その知恵者が創案創出したものが新種新型銀貨だったのである。

## VII 新種・新型銀貨の登場

江戸時代の貨幣制度における本来的というか正統の銀貨は丁銀・豆板銀の名でよばれる銀塊であることは御存知の通りである。そして以下に述べる事実にもかかわらず、ともかくこの銀塊形態の銀貨は幕末までほそぼそながらとはいえ続鑄されていたことを念の為に言上しておく。

前節末尾において出目を求めての悪循環を脱出するために知恵者が現われたと述べたが、その人物とは具体的にいうと川井<sup>ヒサタカ</sup>久敬である。

川井は先ず銀貨のあり方についての発想を180度というか、いわゆる天動説から地動説に転換したコペルニクス的転換といってよいほどの転換を行って、先ず明和2年に1枚5匁の長方形の銀貨を発行した。五匁銀これである。この銀貨面の模様と形態に着目して庶民は<sup>スズリイシ</sup>硯石とよんだ。

これ自体は単なる1個5匁の銀貨であるにすぎない。ところが当局がこれに対して変な？解釈をつけたことから事態がおかしくなってきた。当局の声明とは、銀相場の如何にかかわらず、これとは一切関係なく、あくまでも公定相場の金1両＝60匁＝五匁銀×12枚で通用・決済するのだというのである。例えば銀相場が63匁の場合なら五匁銀の行使によって3匁の出目をうるというわけである。この声明によって本音<sup>ホンネ</sup>＝馬脚があらわになると、たちまちにして庶民の総スカンをくって市場から姿を消して自然消滅してしまった。

思い出してほしい。本稿 P.6 において奥歯にものがはさまっているような、四文銭の発行を以って明和2年発行の事実に出目追求銀貨たる五匁銀に対して、単独で誰の目にも明白な出目追求の本格的開始を物語るものと述べたわけであ

る。当局の添加声明がなければ五匁銀は単なる五匁銀にすぎぬものを、そうでないものにしてしまったからである。

川井の知恵者たところが遺憾なく発揮されて、ここが彼の偉いところになるのだが、失敗の五匁銀の発想に改良を加え、明和9年に明和南鐐二朱判をあらたに発行した。量目 2.7 匁・品位 978/1000・純銀量  $2.64 \text{ 匁} \times 8 \text{ (1 両分)} = 21.12 \text{ 匁}$ 。これに千分の二の金が混入されている。この素材としての銀は純銀を意味する上銀が使用されているので1両に対しては丁銀の場合と全く同じになるのだという。

明和南鐐の南鐐とは銀の別称であってこれが銀貨であることを明示する。しかし南鐐二朱判とあるように、これが金貨二朱判と同じものであることをも明示しそれとしての行使を命じる。この段階では南鐐二朱判が正称であって、南鐐二朱銀とは絶対に言わなかった。銀が二重化されるからである。この<sup>アマチ</sup>過を犯すのは、後の同種銀貨＝天保一分銀・安政二朱銀等の生半可な知識をヒケラかす人物だろう。

その時に流通の元文丁銀では金1両＝銀60匁で必要銀量は、品位451の27匁となる。時の相場は銀68匁であったから必要銀量は30.7匁となり、21.12匁との差が明和南鐐二朱判による出目ということになる。

本位貨幣としての金貨たる小判に対してそれと全く同じ金貨の単位そのものを帯びる新種新型のそして軽量でもある銀貨は、この点からいつも金貨に対する補助貨幣としての銀貨であるといわなくてはならない。表現をかえていえば、本位貨幣としての金貨さえその質量が堅持されているならば、物価上昇による出目の効果相殺の憂き目をみない安定した出目を生むものがこの明和南鐐二朱判なのである。

史実の経過は、商人等の財界も不慣れであったことで、当初からその使用反対の力がつよかったものの、ここは辛棒とばかりに飴と鞭を使いわけて気長に数年かけてようやく流通させることができた。あまり意識されてはいないが、ここに実質的金本位制度がこの国に成立したのである。時に1772＝明和9年であ

る。イギリスの1717年につぐ世界での第2番の出来事である。

因みにこの1772年という年を世界史においてながめてみると、啓蒙哲学者にして親交のあったフランスのディドロ D.Diderot の仲介で、トルコとの戦争中のロシアのエカテリーナⅡ世がイタリア絵画約500点を一括して入手した。これはフランスはバンドーム広場に居住した名門クロザ家の放出品で、ラファイエル・ティティアーノ・ジョルジョーネ等の有名イタリア人画家の作品があり、エルミタージュ美術館のイタリア絵画の間を飾っている。

イギリスでは奴隷制廃止の年である。わが国では江戸三大火事の一つである目黒行人坂の火事が発生しているものの、なんといっても世界で二番目の実質的金本制度成立の年であることを失念してはならないだろう。

貨幣理論上、補助貨幣はその素材価値とは無関係の額面価値にて通用・流通するわけだから、この大なる利点にウェイトを移しはしたものの、形式的にはいえ家康の面目もあって、既述のように幕末には銀は空位であるといわれはしたものの細々ながらも本来銀貨たる丁銀の製造をつづけた。

## VIII 新種・新型銀貨の天下

金1両あたりの銀純分量21.12匁の明和南鐐二朱判は安定した出目を生み出す本命貨として、時の経過とともにその構想は次々と形式をかえながらも引継がれた。文政7年に量目2匁・品位979・金一兩分としての純分量は15.7匁の文政南鐐二朱判として。ついで文政12年に量目・品位も劣る、即ち量目0.7匁・品位989・金一兩分としての純分量は11.4匁としての文政南鐐一朱判が続製された。

ここで第Ⅶ節末において補助貨幣としての南鐐二朱判は理論的にいってその素材価値にかかわることなく、その表面に印刻された通用金額によって流通することによる入手出目の大きさから、製造ウェイトが丁銀よりも南鐐判に移行するということを述べたが、ここでその実際の数値を紹介しておこう。

文政銀とよばれる丁銀は品位36/100であって総製造量は224,982貫だった。



これを公定相場の金一両＝銀 60 匁で両に表示変えすれば、3,749,689 両相当となる。これに対し文政南鐐二朱判・一朱判の総製造量は 16,331,608 両だった。南鐐貨の総量は文政銀のそれに対し、なんと約 4.4 倍である。製造ウェイトの移行がよくわかるであろう。

いずれ間もなく登場することでもあり、また同類の事実を述べていることでもあるし、先走ることにはなるが、ここで次に顔を出す天保丁銀と天保一分銀との場合をみてみよう。

天保銀の品位は 26/100 であり総製造量は 182,108 貫であって、公定相場によってこれを両表示にすると 3,035,133 両となる。それに対して天保一分銀の総製造量は 19,721,000 両であって約 6 倍にあたる。製造の傾斜は益々南鐐貨の結晶とでもいえる天保一分銀の方にかたむいていることがわかるだろう。

サキバシ  
掉尾<sup>チョウビートウビ</sup>を飾る？安政丁銀と嘉永一朱銀の組み合わせの場合はどうであろうか。それに立入るまえに留意してほしいことがある。それぞれの丁銀も南鐐系コインとともに品位・量目がより段々とみすばらしいものになって、幕府の權威・権力の衰えを象徴しているようである。特に目立つものは丁銀の品位であって、文政丁銀の 36 から天保丁銀の 26、そして安政丁銀のそれは 13 と止め処<sup>ド</sup>もなく下降しているのである。その 1/10 ほどより純分を含まない安政丁銀は総製造量 102,907 貫であって、これを両表示すると 1,715,116 両となる。これに対して嘉永 6＝1853 年製造の量目わずか 0.5 匁の嘉永一朱銀は益々製造の傾斜がこれにかたむき、以前よりも多い約 8 倍もの増産をみるのである。

## IX 新種・新型銀貨の完成品・結晶体

金貨の実質的補助貨幣として貨幣史上に顔を見せた明和南鐐二朱判は、既述のように当初こそ一寸の躓<sup>ツマツ</sup>きをみたものの、流通しはじめると庶民も使い勝手もよく、文政南鐐二朱判・文政南鐐一朱判・天保一分銀・嘉永一朱銀そして例外的存在といわねばならないのだろうが（次号において後述する）安政二朱銀といった後継が陸続と登場するのである。



この補助の貨幣群をながめてきてわかることは銀貨の元祖的・本家筋的存在としての丁銀からの補助貨幣の独立化、その意味においての完成＝結晶が天保一分銀（天保8＝1837年）であるということである。

既述のように金貨の補助貨幣としての南鐐系貨を金貨と同じものとして使用せよと命じつつも、一方では銀貨の発行において出目欲しさでの宣告で馬脚を出して大失敗「五匁銀」の苦い先例もあり、他方では銀貨＝丁銀という常識化した一般的理解もあって、なんとこれまた驚きののだが、南鐐貨が丁銀とは別物だということのための説明・解説文をわざわざコイン面に入銘したのである。具体的に述べよう。

明和南鐐二朱判の表面には五文字ずつの二行よりなっている「以南鐐八片・換小判一両」の銘がある。この南鐐貨は8個が金一両＝小判に等しいというのである。この場合の「換」は決して交換を意味するものでなく同じ価値のあるものと思えという当局の意志が示されているのである。同時にこの銘文は金一両＝銀60匁の公定相場から、南鐐二朱判一枚は丁銀の7.5匁に相当するものであることも示しているのである。

同系統の一朱判、例えば文政南鐐一朱判の表面上の三字の二行建ての銘文「以十六・換一両」も同様に丁銀3.75匁にこれ一枚は相当するということを示している。

とまれ補助貨幣としての銀貨流通も65年という半世紀をこえる長期時間が国民意識を変えたと判断した当局は、こことばかりに一つの大英断を下したのである。銀貨面上の銘を金貨単位名をもろに出してズバリ「天保一分銀」にしようというのである。一分銀という表示は天保一分銀にはじまり、以下安政二朱銀という欧米を烈火の如くに怒り狂わせた秘策をこめた——これについては次号で述べる予定——銀貨や嘉永一朱銀等がこれにつづくのである。

ここで篤く<sup>ト</sup>ご留意ありたい。天保一分銀の額面面積が狭いために「一分銀」の三文字銘のみだが、本来は天保一分銀であって決して天保南鐐一分銀でなかったことである。既述のようにこれでは天保銀一分銀と銀が重なるからである。

因みに補助銀貨が南鐐貨系統の〇〇判から独立した？天保一分銀の〇分銀の表示の出現に伴って、金貨の方も例えば一分金を称するようになったが、これはあくまでも通称にすぎず、正称は依然として一分判である。

天保一分銀の質量の数値を述べよう。量目 2.3 匁・品位 989・純分量 2.27 匁・金 2/1000 である。実はこの銀に関する数値を補助銀貨第 1 号の明和南鐐二朱銀と対比すると、次の驚くべき特徴がわかる。即ち明和南鐐二朱判の質量は既述のように量目 2.7 匁・品位 978・純分 2.64 匁である。この対比によって明和南鐐二朱判がふくむ純分 2.64 匁よりも少ない 2.27 匁の銀量であるにもかかわらず、なんとこの通用＝額面価値は二朱の倍増の一分にしたということである。幕府にとって出目入手の神祕的？な存在であることが明白になる。

両者の間には 65 年という長い時間が経過しているとはいえ、マメに記録も残している、そして己の営業成績にもかかわる大事であるので財界人にとってはこのことが周知の大事件となりうるわけである。そこで当局が財界説得のために考えついたのはその素材についての知識だった。

当局によると素材の銀は銀でもその最高級の<sup>ハナフリ</sup>花降銀であるので、天保一分銀の劣るかのように思える質量は明和南鐐貨のそれに充分に対応できるというのが抗弁主旨であった。<sup>シロト</sup>ド素人の悲しさなのだが、銀が原子記号 Ag で示されるように銀と名づけられている元素に変わらないのだがと思うのであるが。ついでに花降銀についてであるが、これまた素人の悲しさで『日本鉱石学』からの単なる受け売りにすぎないことを承知の上で読まれたい。銀が<sup>ユ</sup>鎔解して液体になる——これを湯とよぶ——時、酸素をその鎔融量の 22 倍も吸収し、冷えて凝固する時に逆に酸素を放出するのだが、その時に銀粒を吹き出して銀の表面に多数の銀の小粒を生ずる。この現象を英語で<sup>ツバハ</sup>唾吐き spitting または芽出し sprouting とよぶ。本邦ではこのように生じた純銀を花吹き銀または花降銀とよんだ。したがって花降銀とは純銀を意味することになる。

要するに補助銀貨群は漸次銀量を減じて出目を生み出し、天保一分銀にいたって明和南鐐二朱判のほゞ同量の銀で 2 倍の購買力をもって出目を生むものになっ

たことがわかる。この事実のために当局は素材に最高級品たる花降銀をあてたと弁明し、天保一分銀に代えて正称を花降一分銀にとも考えた。ただし既述のようにコイン面積の狭いために銘は一分銀のみとして、その花降を表示するものは花＝桜花とばかりに一分銀の四方を桜花で飾ることに決定したのである。

このような由来をもつ天保一分銀は本位貨幣としての天保小判（量目 3.0 匁・品位 568・純分 1.7 匁）とペアを組み、名コンビとして補助貨幣としての威力を余すところなく発揮して、大量の安定的出目を幕府財政に与えたのである。

本誌前号において（P.13）歴代江戸時代金貨の長命順を述べたが、なんと天保小判が驚くなかれ実質的第2位の22年であることを告げるとともに、もしも天保時代の平和が乱されなかったならばその期間は倍加さえしたかもしれないと述べた。

世が順調で平穩・泰平に進行していたのなら幕府は財政面からいっても安泰であって江戸時代も更に40～50年は長命だったろうと思えるのである。

なぜ幕府は史実のように崩壊したのか。これは国＝基本方針が鎖国から開国に転換したからである。鎖国の大前提で思慮外的存在だった国外の数ヶ国の徒党を組んだ問答無用とばかりの圧力による結果なのである。それは蟻の穴の一穴から堤防がくずれるという言葉を地でゆくようなものだった。

アメリカのペリーの開国事件がこれである。幕府当局はこれまで通りに、実質的補助貨幣である天保一分銀の性格を名目的にもそうであるようにと法制化して周知させる手続きは一切せずに放置していた。ペリーがこの盲点をつくことによって事態を大きくし、天保一分銀が与える出目のみならず、天保金そのものをものみこむものとして事件を大きくしてしまった。そして幕府をして財政面から窮地に追込んで史実のようにさせたわけである。これが日本開国事件であるが、これについては稿を改めて述べることにしたい。